

最新！宗教情報 /// No. 2

◎中国が人権行動計画、「法に基づく正常な宗教活動の保護」も

【C J C = 東京、4/20】中国政府は4月13日、国民の政治的権利や少数民族対策の改善などをめざす国家人権行動計画（09～10年）を公表した。人権をテーマにした国家計画が策定されるのは初めて。

行動計画の「公民の権利と政治的権利の保障」の項目では、法に基づく正常な宗教活動の保護、も挙げられている。

計画の対象は幅広いものの、既存の政策の範囲内が大半で抽象的な表現が多い。

ただ人権支援団体の反応は好意的なものが多い。弱点を指摘しながらも、さらなる変革への期待を込めている。

国際アムネスティは、計画公表が人権保護の重要性と国際基準の順守を示したものと指摘している。特に目標年度として2010年を掲げたことは、それが達成されれば人権への重要な進展だ、と見られている。

◎死後の世界を信じるのは英国人の53%

【ロンドン=C J C、4/20】英国の神学シンクタンク『セオス』が2060人を対象に行った調査で、幽霊や超自然を信じる人の多いことが分かったと4月13日発表した。

コムレス調査社に委託して2008年10月から11月にかけて行ったもの。人間の魂の存在を信じると答えた人が70%、天国を信じるのは55%、死後の世界を信じると回答した人は53%だった。

39%が幽霊の存在を信じており、27%が霊魂の再生を信じている。星占いを信じる人は22%、占いやタロットを信じる人も15%だった。

1950年のギャラップ社調査では、幽霊の存在を信じると答えたのは10%、幽霊を見たことがあると答えたのは2%だった。51年にはカード占いを信じる人は僅か7%、星占いは6%だったことから、『セオス』は半世紀の間で人々の意識が著しく変化したことに着目している。

1998年の調査では、カード占い18%、星占い38%、幽霊40%、幽霊と接触した人15%、また2004年では幽霊を信じる人が若干増え42%。

『セオス』のポール・ウーリー代表は「科学の力ですべての説明を済ませようとする動きはもはや過去のものとなった。今回の調査結果は、人々がより多様かつ、型にはまらない信仰を持つようになったことを示している。この10年間で見ると、超自然的なものへの懐疑が僅かながら強まっている」と語った。

『セオス』は2006年、政治・社会問題が信仰に与える状況などを調査するため設立された。英国国教会のローワン・ウィリアムズ・カンタベリー大主教、カトリック教会のコーマク・マーフィー＝オコナー・ウエストミンスター大司教などの支持を受けているという。

リン・ホワイトの主張（２）

- 「キリスト教の、とくにその西方的な形式は、世界がこれまで知っているなかでもっとも人間中心的な宗教である。……キリスト教は古代の異教やアジアの宗教（おそらくゾロアスター教は別として）とまったく正反対に、**人と自然の二元論**をうちたてただけではなく、人が自分のために自然を搾取することが神の意志であると主張したのであった」。

13

リン・ホワイトの主張（３）

- 「自然は、人間に仕える以外になんらの存在理由もないというキリスト教の公理が斥けられるまで、生態学上の危機はいつそう深められつづけるであろう」。

14

3. 「エコロジーの神学」を目指して

15

1970年代以降のキリスト教の応答

1. 神の信託管理人思想の展開
2. 自然理解の再解釈
3. 基本概念の拡張
 - 「神の国」「隣人愛」「正義」
4. フェミニスト神学からの問題提起
5. 米国・福音派における環境意識の高まり

16

1. 神の信託管理人思想の展開

- ジョン・パスモアは『自然に対する人間の責任』の中で、キリスト教の伝統の中には、自然の支配者としての人間のイメージばかりでなく、自然のstewardとしての伝統もあることを示し、「スチュワード精神」(**stewardship**)の概念を導入した。

17

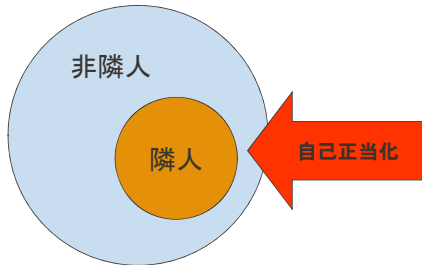
2. 自然理解の再解釈

- ゲルハルト・リートケは、エコロジーの視点から旧約聖書を解釈し直した。自然と人間の関係を問う際に、創世記だけに注目するのではなく、他の箇所にも、とりわけこれまで見過ごされがちであった詩編や智恵文学にある自然描写の多様性に目を向けさせた（『生態学的破局とキリスト教』）。

18

3. 基本概念の拡張 (1)

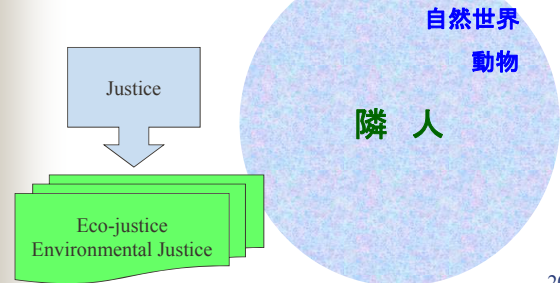
- 伝統的な「隣人」の理解



19

3. 基本概念の拡張 (2)

- 「隣人」「正義」の拡大



20

4. フェミニスト神学からの問題提起

- エコ・フェミニズム
 - 人間による自然支配と、男性による女性支配の間にアナロジー(類比関係)を見出す。
- 黙示的終末論への批判
 - 現在の自然環境は破棄され、新しい天地が到来するという考え方は反エコロジカルではないか。
- 生と死の二元論への批判
 - 「最後の敵として、死が滅ぼされます」(一コリ 15:26)
 - 生と死の不可分性: 食物連鎖、アポトーシス

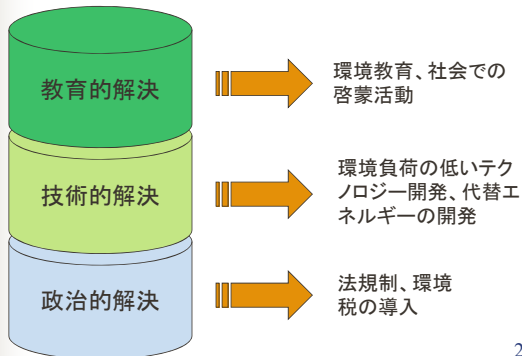
21

5. 米国・福音派における環境意識の高まり

- 福音派(Evangelicals)とは何か?
 - 中絶、同性愛問題への取り組みを共有する宗教保守勢力
- 福音派の従来の態度
 - 強い終末意識(千年王国思想)のため、環境問題には、まったく関心を示さなかった。
- 近年の急速な変化
 - National Association of Evangelicals (NAE)のRichard Cizik (元 Vice President)を中心に環境問題への取り組みを始めている

22

様々な日常的取り組みの必要性



23

参考文献

- リン・ホワイト『機械と神——生態学的危機の歴史的源泉』みすず書房、1999年。
- ジョン・パスモア『自然に対する人間の責任』(特装版)岩波書店、1998年。
- ゲルハルト・リートケ『生態学的破局とキリスト教——魚の腹の中で』新教出版社、1989年。
- ユルゲン・モルトマン『創造における神——生態論的創造論』新教出版社、1991年。
- 富坂キリスト教センター『エコロジーとキリスト教』新教出版社、1993年。
- 笠井恵二『自然世界とキリスト教』新教出版社、1999年。
- ロデリック・F・ナッシュ『自然の権利——環境倫理の文明史』筑摩書房、1999年。
- 芦名定道、小原克博『キリスト教と現代——終末思想の歴史的変遷』世界思想社、2001年。

24